
《論文》

コールマン・ヒューズとソーシャルメディア時代の アメリカ黒人保守主義

鳥居 祐介

要約

本稿は、現代アメリカの人種差別抗議運動に対する批判で知られる若き黒人コラムニスト、ポッドキャスター、ミュージシャン、ラッパーであるコールマン・ヒューズ（Coleman Hughes）の思想、言論、表現活動を考察する。ヒューズをブッカー・T・ワシントン以来の黒人保守主義の系譜に位置づけ、インターネットやソーシャルメディアが従来のアカデミズムと主要メディアを脅かす役割を担うようになった現代の言説空間において、彼が果たしうる建設的な役割について展望している。ヒューズは共和党を支持しておらず、保守派を自認してはいないが、彼が書くコラムやラップ、ポッドキャスト番組での多彩なゲストとの対話から、彼が黒人保守主義の思考の枠組みと問題意識の伝統を受け継ぎ、黒人社会の「裏切り者」と見られることを戦略的に受け入れていることがわかる。過去10年、人種問題をめぐる米国民の分裂は加速し、保守派ではトランプ的な反知性主義ポピュリズムが、リベラル派でも過激な反人種主義や、キャンセルカルチャー、ウォーキズムが、事実に基づいた建設的な議論を阻害している。ヒューズのような中道的な黒人保守派言論人に期待される役割は、これまで以上に大きなものとなっている。

1. はじめに

2022年1月18日、コールドマン(COLDXMAN)を名乗るラッパーのミュージック・ビデオ「冒瀆」(“Blasphemy”)がYouTube上で公開された¹。映像の舞台は薄暗い大会議場である。満員の傍聴者がいる。コールドマンは演台に立ち、ラップを始める。自分の言うことは「冒瀆」であるらしい、友人を何人も失った、これから投獄されるのか磔刑に処されるのかわからないが、言わ

せてもらう、と彼はいう。するともう一つの演台に、別人格のコールドマンが現れる。貴様は自分が黒人であることを忘れ、白人に首輪をつけられ、白人からカネをもらい、魂を売り渡したクズ野郎だ、と罵倒する。罵倒に感化された傍聴者の一人がコールドマンに指をさす。指先から弾丸が発射され、コールドマンの頭部を打ち抜く。彼は白目をむいて倒れ、息絶えるが、まもなく息を吹き返すと「冒涇」の演説を再開する。

奴隷制、奴隷制、奴隷制

お前は過去に生きる、俺は過去を振り切る、そのほうが勇気がいる

俺は調べた、奴隷はみんな墓の中、でなきァモーリタニア

小切手などいらぬ、俺の代金は高い、最安値でもアングル・サムには払えない

奴隷制補償(Reparation=黒人奴隷制度の被害者の子孫に対する連邦政府による被害補償)への反対論である。ミュージックビデオ全体が、2019年のジュンティーンズ(奴隷解放記念日、6月19日)にワシントンDCの下院司法委員会で開かれた、奴隷制補償推進法案H.R.40の公聴会を再現しているのだ。この公聴会で最も注目を集めたのが、法案への賛成論を唱えたタナハシ・コーツ(Ta-Nehisi Coates)と、反対論を唱えたコールマン・ヒューズ(Coleman Cruz Hughes)との論戦であった。コーツは、2014年に『アトランティック』誌に寄稿した「奴隷制補償賛成論(The Case for Reparations)」が広く読まれ、続く翌年の『世界と僕のあいだに』(2015)がベストセラーとなり、この時既に現代アメリカを代表する黒人作家として知られていた²。他方ヒューズは、オンライン雑誌を主体に奴隷制補償への反対論を展開する異色の若手黒人論客として一部で注目されていたものの、当時はまだコロンビア大学の学部生であった。ラッパーのコールドマンとは、コールマン・ヒューズその人である。「冒涇」のミュージックビデオは、ヒューズ自身の二年半ほど前の体験をモチーフにした作品というわけである。映像は、監督にイアン・ポンズ・ジュエル(Ian Pons Jewell)を起用し、多数のエキストラを動員した大掛かりなものである³。楽曲はラップはもちろん、トラックも全てヒューズ自身の制作によるもので、全てがプロフェッショナルな水準のものである。特定の組織には属さず、自身で運営するポッドキャスト番組『コールマンとの会話』を拠点にメディア出演と執筆活動を行い、ミュージシャン、ラッパーとしての活動も本格化させているこの多芸な言論人は、どのような知的伝統の中から現れ、どこへ向かおうとしているのだろうか⁴。

本稿は、コールマン・ヒューズの思想、言論、表現活動をブッカー・T・ワシントン(Booker T. Washington)以来の黒人保守主義の系譜に位置づけ、インターネットやソーシャルメディアが従来のアカデミズムと主要メディアを脅かす役割を担うようになった現代の言論空間において、彼が果たしうる建設的な役割について展望している。以下にみるように、ヒューズは保守主義者を自認してはおらず、共和党政治に参画してもいないが、彼が書くコラムやラップ、ポッドキャスト番組での多彩なゲストとの会話からは、彼が黒人保守主義者の伝統的な思考の枠組みや問題意識を受け継ぎ、黒人社会の「裏切り者」と見られることを戦略的に受け入れていることがわかる。

近年、ソーシャルメディアの成長と歩調を合わせるように人種問題をめぐる米国民の分断は加速し、保守派ではトランプ的な反知性主義ポピュリズムが、リベラル派では教条的な反人種主義やキャンセルカルチャーが蔓延し、事実に基づいた建設的な議論を阻害している。アメリカ社会が感情的対立を乗り越えた対話を取り戻すために、ヒューズのような中道的な黒人保守主義者が果たす役割がかつてなく重要になっていることを論じたい。

2. コールマン・ヒューズ

1996年生まれのヒューズは、アフリカ系アメリカ人の父親とプエルトリコ系の母親のもと、ニュージャージー州モンクレアで育った。ニューヨーク市の通勤圏内の郊外住宅地で、「裕福かつ人種的に多様なコミュニティ」であり、勉強が得意な黒人の少年にとって非常に恵まれた環境であったとヒューズは振り返っている。母親は政治意識が高く、マルクス主義に共感し、社会民主主義を信奉するリベラル派だった。プエルトリコ系だが「アジア系のタイガー・マザー」ステレオタイプを彷彿とさせるような教育熱心さで、ヒューズ少年は常にオールAの成績を求められた。彼は母親の期待通り成績優秀で、高校の最終年度には教育省の大統領奨学生に選出された。父親は歴史的黒人大学の名門ハワード大学を出た専門職で、読書家であり、特に政治的に保守的であったり共和党支持者であったわけではなかったが、書斎の本棚には黒人保守主義者として著名な経済学者トマス・ソーウェル(Thomas Sowell)の著作が数冊あり、ヒューズ少年は熱心に読んでいた⁵。

ヒューズ少年は音楽の才にも恵まれ、十代半ばにはジャズドラム、ジャズトロンボーンに習熟し、ラップとトラック制作にも熱中する。高校卒業が近づくと、トロンボーンで身を立てることを志し、ニューヨーク市のジュリアード音楽院に進学した。しかし入学後まもなく母親が急死したことをきっかけに職業的なジャズミュージシャンとしての将来に疑念を感じるようになり、退学してしまう。自分探しの期間が必要と感じたヒューズは、ニューヨーク市のチャールズ・ミンガス・トリビュートバンドでトロンボーン演奏を続けつつ、コロンビア大学に入学して哲学を専攻することにした。

コロンビア大学のキャンパスで、ヒューズはブラック・ライブズ・マター運動（以下BLMとする）の広がりや、運動に呼応するように全米の大学キャンパスを覆うようになったウォーキズム(wokeism)やキャンセルカルチャーと呼ばれる風潮を目の当たりにする。2010年代の半ば頃から、リベラル色の強い大学、企業組織、メディアでは、人種問題やジェンダー／セクシュアリティの問題について構成員が意識を高めること、社会正義に目覚めること(＝ウォークであること)が、かつてないレベルで組織的に奨励されるようになった。その結果、この風潮に批判的な者の目には明らかに過剰とみえる事例が頻発するようになった。差別や偏見を助長するとされる発言や、差別や偏見の当事者以外が口にするのは不適切とされる言葉を発するなどした人物が、ソーシャルメディア上で罵詈雑言を浴びせられ、謝罪に追い込まれ、仕事の機会を奪われ、酷い場合には職そのものを失う(＝キャンセルされる)ケースも起きる。コロンビア大学のようにとりわけリベラル色の強い大学キャンパスでは、教授陣も学生たちも、自分の発言がウォークな人々に

よって不適切と見なされ、攻撃されることを恐れ、萎縮しているように見えた。ヒューズは自分の政治信条をどちらかと言えばリベラルと自認していたが、こと人種問題に関してはソーウェルの著作の影響もあり、リベラル派のコンセンサスとなっている現状認識に懐疑的であった。現代アメリカ社会が隅々まで白人至上主義に支配されているというが、どのような状態を基準にそう言っているのか。「制度的人種差別(systemic racism)」という概念にはどこまで実証的な裏付けがあるのか。大学の教室でそうした疑問を口にすると、皆が眉を顰めるばかりで、議論にならない。しかし、ほどなくしてヒューズが気がついたことは、一対一でプライベートに話せば、教員も学生も多様な意見を持っていることであった。ウォーキズム、キャンセルカルチャーの風潮に疑問、危機感を持っている者はリベラル派の学生にも多く、しかるべき場があれば建設的な対話は可能と思われた。

ヒューズが最初に出会った言論活動の場は、米国内ではなくオーストラリアに拠点を置くオンライン雑誌『キレット(Quillette)』であった。2015年に元オーストラリア連邦保健省の職員でソーシャルメディア・インフルエンサーだったクレア・ラーマン(Claire Lehmann)が立ち上げた「長文分析と文化評論」の雑誌であり、そのスローガンは「自由な思想は死せず(Free Thought Lives)」、編集方針は「政治的に中立で、理性、科学、ヒューマニズムを指針とする」である⁶。ヒューズのデビュー記事は2018年4月の「カニエ・ウエストと黒人保守主義の未来」であった。rapperのカニエ・ウエスト(Kanye West)が、「俺はキャンディス・オーウェンズ(Candace Owens)の考え方が大好きだ」とツイートしたことについての論考である。オーウェンズは、BLMとフェミニズムを早口の毒舌でこきおろす黒人女性、ドナルド・トランプを賞賛する炎上系として知られる若手の保守派コメンテーターである。「黒人を民主党支配と長年の被害者意識から解放する」ことを目指したソーシャルメディア・キャンペーン“BLEXIT”を率いている。カニエ自身、その少し前にトランプ大統領への支持を表明して物議を醸していたが、オーウェンズへの共感のメッセージをツイートしたことで、トランプのパーソナリティだけでなく、より広く右派ポピュリズムに共感していること、民主党の政策と価値観に幻滅、反発していることを改めて明らかにしたことになる。ヒューズは、リベラルな主流メディアや言論人、民主党政治家は、カニエやオーウェンズが体現する黒人の民主党からの離反を例外的事例と片付けてはならず、現実を見なければならぬと警告する。各種の世論調査データをみれば、現代の人種差別は黒人の人生を著しく不利にするほどのものではないと考える黒人、現代のラップ音楽が社会に害をもたらしていると考え、人種的マイノリティを傷つける「マイクロ・アグレッション」とされる言動（たとえば「あなたはきちんとした英語を話しますね」「私は人種の違いなど気にしません」「この社会では頑張ればだれもが成功できます」「アメリカは人種の坩堝です」）が「気にならない」とする黒人、入学選考や就職選考は能力主義だけでやるべきと考える（つまり、人種に基づくアファーマティブアクションに反対する）黒人、こうした考えを持つ黒人は決して奇特定の存在ではない。世論調査データを信じるならば、いずれの項目でも半数近いが、項目によっては過半数の黒人が人種問題について保守的とされる回答をしている。高学歴なりベラル派のエリートたちが、中間層以下の白人たちの庶民感覚を見失ったためにドナルド・トランプ現象を許し

たという指摘は2016年以来よく行われているところだが、ヒューズに言わせると、高学歴なリベラル派エリートはごく普通の黒人の感覚にも注意を払っていない。黒人の90%以上が今も民主党候補に投票しているのは、共和党候補者との二者択一において民主党候補者のほうがいくらかましであろうという消極的な選好に過ぎず、彼らの多くはリベラル派エリートの人種イデオロギーや人種政策に賛同してはいない。最大級の知名度と影響力を持つラッパーであるカニエ・ウエストなら、リベラル派の目を覚ますことができるかもしれないと期待して、ヒューズは記事を締めくくる⁷。

続く2018年5月の「人種主義のトレッドミル」では、現代アメリカのリベラル／進歩派の人種関係に関する言論が、トレッドミルのように同じところを永遠に走り続ける自己完結サイクルに陥っているとヒューズは論じた⁸。『21世紀の啓蒙』を著した心理学者スティーブン・ピンカー(Steven Pinker)ら中道的な知識人が近年盛んに警告していることだが、人々は数値データで示される長期的な社会変化よりも直近のショッキングなニュースや個人的に感情を揺さぶられる経験に影響されやすく、とりわけ進歩派の人間は進歩に関する否定的バイアスを抱きやすい⁹。アメリカの人種問題はその典型で、人種主義は20世紀を通じて劇的に後退しているにも関わらず、進歩主義的リベラルはそれを認めようとしないとヒューズはいう。たとえば、ギャラップの世論調査で黒人と白人の異人種間結婚に賛成するアメリカ人は1958年に4%だったが、これが2013年には87%になっている¹⁰。20世紀半ばの公民権運動が人種差別の違法化に成功してから半世紀、人々の態度においても長期的な進歩は起きている。その中で、進歩がないようにみえるのが黒人の貧困率の高さ、人種グループとして比較したときの白人との経済格差である。現代の反人種差別主義リベラルはもっぱらここに注目し、収入、住環境、雇用など、なんであれ白人との間に結果の不平等が存在するならば、それ自体が黒人に対する不当な人種差別が存在する証拠であるという論法を使うようになってしまった。この論法はタナハシ・コーツや後述のイブラム・X・ケンディ(Ibram X. Kendi)らに顕著で、ヒューズはこれを、「格差の誤謬(disparity fallacy)」と呼んで批判している。「格差の誤謬」とは、あらゆる社会経済指標において黒人が劣位に見えるデータを選択的にとりあげ、その原因は有形、無形の制度的人種差別であるという結論に飛躍することである。たとえば、現在の黒人の失業率は白人の失業率より高く、リベラル派の論者の間ではこれは当然のように制度的人種差別によるものとされる。しかし歴史的にみると、人種差別が法的に行われリンチが横行していた1890年から1930年までの期間、黒人の失業率は白人のそれよりも低かった。失業率であれ別の指標であれ、人種間の格差を人種差別のみで説明することは論理的でない。主要メディアは、人口比で14%である黒人がMLB選手の8%しかいないのは大量投獄や白人の野球ファンの人種偏見が原因ではないかと大真面目に議論するが、NBA選手の70%以上が黒人で、白人は20%未満であることについては問題視しないとヒューズは指摘する¹¹。

同じ記事でヒューズがもう一点強く批判しているのが、コーツやケンディらのように格差の誤謬に陥った知的リーダーたちが、格差の一要因として黒人貧困層の家族構成や価値観を話題にすること、いわゆる「貧困の文化」を議論しようとする事自体を「被害者叩き(victim-blaming)」、黒人貧困層への偏見を煽る人種差別的言動と決めつけて攻撃し、排除する傾向である。格差を目

の前にして「アメリカ社会が人種差別に満ちている」と「黒人が劣っている」のどちらの説明をあなたは信じるか、という二択を提示して前者を選ばせようとする論法をケンディらはよく使うが、これは誤った二択であるとヒューズはいう。黒人貧困層の文化のある側面が、貧困の連鎖を招く自己破壊的なものになっている可能性を議論することは、黒人が生まれつき劣等である可能性を議論することと同じではない。文化的な差異を計算に入れなければ、西インド諸島系の黒人やアフリカ諸国からの近年の移民のバックグラウンドを持つ黒人が、そうでない黒人よりも学歴、所得が高い傾向は説明できない。主流メディアが「レイプ文化」「銃の文化」「消費文化」といった概念については盛んに議論するのに、黒人貧困層の文化の負の側面に触れることをタブー視しているのは矛盾であり、有害であるとヒューズは論じる¹²。

2019年の『キレット』は毎月のようにヒューズの記事を掲載している。前述の2019年6月19日の奴隷制補償公聴会での彼のタナハシ・コートツへの挑戦を準備したのは、2019年3月の「奴隷制補償、そしてタナハシ・コートツによるピュロスの勝利」であった。「ピュロスの勝利」とは失うもののほうが大きい勝利という意味である。コートツは、奴隷制補償という過去に何度か浮上しては葬られてきた政策を再び国政の表舞台に引き上げることに成功したが、その成功そのものが、コートツが長年訴えている主張の矛盾を露呈させているとヒューズはいう。アメリカは昔も今も社会の隅々まで徹底して白人至上主義に支配された国であり、白人はそのことから目を背け続けている、というのがコートツの一貫した主張だが、もしそれが正しいとすれば、なぜコートツは著名なベストセラー作家なのか。エリザベス・ウォーレン(Elizabeth Warren)、カマラ・ハリス(Kamala Harris)、ナンシー・ペロシ(Nancy Pelosi)ら民主党の重鎮政治家が、コートツの提案する奴隷制補償が政治的に実現困難と知りつつ、政策に取り入れたいと口を揃えてリップサービスするのはなぜか。コートツ自身は、なぜ白人は私の書くものを好むのだろうか？それはきっと私の真意を理解できていないからだ、と自問自答するが、ヒューズはこれについて、コートツの読者の読解力に問題はないだろうと皮肉を込めている。ヒューズの答えは、アメリカ社会が今も白人至上主義に満ちていると信じ、その信条をコートツのような黒人の知識人によって承認されることを欲しているのは平均的な黒人ではなく、リベラルな白人だから、である¹³。

公聴会でのヒューズの主張の全文も、2019年6月20日付で『キレット』が載せている。ヒューズは、奴隷制度とジム・クロウ制度という国家の恥すべき不公正の歴史を直視し、記憶することは重要であり、南北戦争後に解放奴隷に補償がなされなかったことは歴史的、国家的な不公正であるとし、奴隷制補償の背景にある善意に理解を示した上で、現在において補償を行うことは道徳的にも政治的にも正当化できない政策である理由を述べた。その骨子は次のようなものである。

- ・大量収監や暴力犯罪など、現在生きている黒人が直面する喫緊の問題解決に必要な政策は教育改革や刑事司法改革であり、奴隷制補償の議論は目くらましである。
- ・2008年から2009年にかけて下院、上院がそれぞれ奴隷制度とジム・クロウ制度への謝罪決議をしており、連邦政府による象徴的な謝罪は既に行われている。
- ・連邦政府補償は、被害者に直接なされなければ公平ではない。存命の被害者はいない。自

分の祖父母であればジム・クロウ制度の被害を直接受けており、その被害の補償を受ける資格があるかも知れないが、自分は裕福な郊外で何不自由なく育ち、アイビー・リーグの大学に通っている。自分が血縁を根拠に数世代前の被害者への補償金を連邦政府の予算から受け取り、仕事を掛け持ちして家族を支えているような若者が何も得られないのは不公平であり、国民の分断を悪化させる。

- ・補償を受けることは、連邦政府に被害者として認定されること。世論調査では黒人の3分の1は奴隷制補償に反対している。本人の同意なく彼らを被害者と認定することは不当である。
- ・我々の市民としての自覚は血統によって差があるべきものではないし、市民としての義務は金銭で取引されるべきものではない。

国民の分断という点については、ヒューズは個人的な危機意識にも立ち入っている。公聴会でのこの証言台に立つと決めたことで、周囲の人間は自分の身を案じている。私は民主党候補にしか投票はしたことがないが、こういう意見を述べれば皆に共和党支持者だと思われ、国民の半分に憎まれる。そして、自分は共和党支持者ではないと距離をとらないといけないので、残りの半分にも憎まれる。国民はそれほど分断している。奴隷制補償がもし実現したとして、国民の分断は深まるだけであると述べた¹⁴。

『キレット』と並んで大学在学中からヒューズが寄稿し始めたもう一つの媒体が、保守系シンクタンクのマンハッタン・インスティテュートの機関誌、『シティ・ジャーナル(City Journal)』である。大学を卒業した2020年5月には同誌の寄稿編集者となり、「人種とアイデンティティ政治について最も鋭敏な批評をする若手言論人の一人」を迎えた、と紹介された¹⁵。2018年にヒューズが寄稿した記事は、「新・人種統合主義者たちが見失っているもの—黒人学校は100年を超える成功の歴史あり、分離すなわち不平等とは限らない、不平等には他の原因がある」や「最低賃金に関する誤解—そして人種」といったものであった。いずれも、リベラル派の政治言論が、人種が主要な要因ではない性質の問題を人種問題にすり替えようとしている、という批判である¹⁶。

2019年10月、公聴会への登壇を終えて知名度が上がり始めていたタイミングでヒューズが『シティ・ジャーナル』に発表したのが、「アンチインテレクチュアルであるためには」と題した書評記事であった。イブラム・X・ケンディ『アンチレイシストであるためには』(2019)を厳しく批判したものである。ケンディは、2016年に人種主義の思想史の研究『はじめから烙印を押されて』で全米図書賞を史上最年少で受賞した歴史家、反人種主義活動家である¹⁷。『アンチレイシストであるためには』は、ケンディが自身の半生を振り返る自叙伝の形式をとりつつ、アメリカ社会がいかに現在も人種主義=レイシズムの強固な支配下にあるかを論じる社会評論であり、その中で我々がいかにレイシスト権力の側に組せず、レイシズムと闘うアンチレイシストとして生きるべきかを説く自己啓発書でもある。2020年5月に起きたジョージ・フロイド殺害事件以降はとりわけ注目され、『アンチレイシストであるためには』は2020年のニューヨーク・タイムズ・ベストセラーの1位となり、ロビン・ディアンジェロ『ホワイト・フラジリティ 私たちはなぜレイシ

ズムに向き合えないのか?』(2018)と並んで高学歴リベラル派の白人にとっての必読書となっている¹⁸。ケンディは2020年7月にはボストン大学に新設されたアンチレイシスト研究センターのディレクターに就任し、『タイム』誌の2020年「最も影響力のある100人」にも選出されている¹⁹。

主流メディアとリベラル派のアカデミズムにおいて現代アメリカの人種問題の権威となったケンディであるが、彼の提唱する概念や政策は、多くのリベラル派の識者も本心では首肯しかねているであろう極端なものが多い。ヒューズの書評はまず、ケンディによるレイシズム、アンチレイシズムの独自の定義と、善悪二元論的世界観の妥当性を疑う。ケンディは、この世界の全てのアイデア、すべての政策は人種間の不平等の維持に寄与するもの＝レイシストなもの、平等に寄与するもの＝アンチレイシストなもの二種類しかなく、人種問題と関係のないアイデアや政策というものは存在しないと、文字通りに述べている。また、レイシズムとアンチレイシズムが対立するこの世界において中立の立場というものは存在せず、アンチレイシストなアイデアや政策に積極的に賛同しないことはすなわちレイシストであるとする。資本主義は本質的にレイシストであり、人類が核の恐怖にさらされているのも、気候変動に怯えているのもレイシストな政策によるものだとケンディはいう²⁰。

ヒューズは、この本のどこまでが実証的な議論を意図している、どこからがケンディの内なる真実の告白なのかは判断しにくいとしつつ、反論を加えていく。たとえば、キャピタルゲイン減税という経済政策について、あらゆる政策がレイシストかアンチレイシストであるというケンディに従うと、それは株式所有者が恩恵を受ける政策であり、株式所有者の中に黒人は少ないのであるからレイシストな政策であり、これに反対をしない者はレイシストということになる²¹。このような政策評価基準に意味があるだろうか。資本主義が本質的にレイシストだというのが、社会主義国、共産主義国の事情との比較をしたのか。あるいはジム・クロウ制度下の南部では、州政府の人種隔離政策に対して民間の鉄道会社やバス会社が人種別の車両を維持するコストを理由に反旗を翻した事例があり、南アフリカでも民間の家主連がアパルトヘイト政策に逆らって非白人を入居させた事例があるが、市場原理が人種主義に優越した例が過去にいくらかでも見つかることをどう考えるのか。ヒューズは、結論が先行したデータ選択の恣意性を厳しく批判する。ケンディは黒人のアルツハイマー罹患率が白人より高い、前立腺がんや乳がんの死亡率が白人より高いと述べて医療においても黒人の命が軽んじられているというが、アルツハイマーによる死亡率は白人の方が高く、食道癌、肺がん、皮膚がん等、他の癌での死亡率も白人の方が高いというデータもある。全体として、「議論は説得力がなく、資料調査は不適切、ファクトチェックは不十分、ところどころ矛盾した一冊」で、アンチレイシストよりは「アンチインテレクチュアル」つまり反知性主義者になる方法が書かれた本である、とヒューズは結論づける²²。

ヒューズは、ケンディの『アンチレイシストであるためには』がそれでも一読に値するのは、人種問題に関する論争のリベラル派、進歩派の現在地を明確にしてくれるからだという。ケンディは、アンチレイシズムのゴールは人種間の「不平等(inequality)」を無くすことであり、アンチレイシストな差別(antiracist discrimination)はその唯一の手段であると明言している²³。書評としては少々アンフェアではあるが、ヒューズはケンディが別途、政治情報サイト『ポリティコ』

で公開している政策提言の全文を引いている。それは、憲法修正によって人種間の不平等を違憲化する、公職にある者がレイシストな思想を持つことも違憲化する、連邦政府にアンチレイシズム省を設置し、予算を恒久化し、政権交代に影響を受けない人種問題の専門家を配置する。アンチレイシズム省が連邦政府、州政府、地方自治体のあらゆる政策がレイシストではないか、レイシストな思想を表明している公職者はいないかを監視する、といったものである²⁴。ケンディ自身のような専門家があらゆる公職者の思想統制を行うというビジョンは全体主義そのものであり、このような主張がアメリカ政治の主流に入り込むことも、ここ数年の風潮を見るとあり得ないことではないとヒューズは警戒する²⁵。

2019年の12月からヒューズは毎週一人のゲストを招いて一対一で討論するポッドキャスト番組『コールマンとの会話』の配信を開始し、独立したポッドキャスターとしての知名度を高めていく。現在は会員制のウェブサイトColemanhughes.orgを立ち上げて有料コンテンツも用意し、こちらを主要な収入源かつ言論プラットフォームとしている。ゲストは著述家、学者、活動家、経済人など様々で、議論のテーマは人種問題に関わるものが多いが、ジェンダー、宗教、科学など幅広い。スティーブン・ピンカー、ノーム・チョムスキー(Noam Chomsky)、ヤシャ・モンク(Yascha Mounk)といった著名な知識人も登場している。全体的な傾向としては、リベラル派の教条主義と保守派の反知性主義の両方を嫌い、リバタリアンの傾向があり、科学的でデータ重視の議論を好む人物、つまり知的な枠組みがヒューズに近く議論が自然にかみ合う人物がゲストとなることが多いが、奴隷制補償に賛成する歴史家キャサリン・フランキ(Katherine Franke)、左派ジャーナリストのエズラ・クライン(Ezra Klein)、BLM支持派ジャーナリストのニケル・テリー・エリス(Nicquel Terry Ellis)など、イデオロギー的には明らかにヒューズよりも左寄りのゲストも頻りに登場する。また、人種間のIQ格差を好んで論じる政治学者チャールズ・マレー(Charles Murray)のように、右派の側から物議を醸す人物も登場する。イデオロギー的に自分に同意しないであろう人物に積極的に出演オファーをしているとヒューズはいう。

建設的な対話を旨とするヒューズには「論敵」に該当する人物はいないが、ケンディがそれに近い存在となっている。2020年10月、ヒューズはケンディに公開書簡の形で討論を申し込んだ。『コールマンとの会話』に出演いただけるとよいが、あなたが望む他の方法でもよい、人種問題についてのオピニオン・リーダーとして国民に多大な影響力を持つようになったあなたと、あなたとは大きく異なる立場をとり、あなたの著作を批判し、対案を示している私に対話することは、人々が真実を探求する上で有意義なものになるはずだ、という趣旨の公開書簡であった²⁶。数か月が過ぎた2021年3月、ケンディ側から断りの返事を受けたヒューズはポッドキャストやソーシャルメディアを通じ、視聴者に向けて感情のこもった報告をした。ケンディのように極端な主張をする人物が、自分を批判する人間との対話を避け続け、それが許されてしまうのがアメリカの現状だとヒューズはいう。自分だけでなく、ジョン・マクウォーター(John McWhorter)、グレン・ラウリー(Glenn Loury)、トーマス・チャッターソン・ウィリアムズ(Thomas Chatterton Williams)ら、ケンディの著作と思想を批判している識者は大勢いるが、ケンディは誰とも討論しようとしな。断るのはもちろんケンディの権利だが、断られたという事実を公表するのは自

分の権利だとし、公開書簡以降、複数の大学（ケンディが所属するボストン大学も含む）とTED Talksから、ケンディと自分との公開討論会のオファーがあったが、すべてケンディ側の意向で実現しなかったとヒューズは暴露した²⁷。

ケンディが2020年12月の『ビジネス・ジャーナル』のインタビューで述べた内容が、ヒューズの憤りに火をつけたようである。なぜヒューズとの討論を受けないのかと聞かれたケンディは、「私の言うことを一貫して歪曲(misrepresent)し、その歪曲した内容に対して反論するような人物とは対話しない」「なぜ時間を無駄にする必要がある？大学の教員を実際にやっているような人間となら討論してもよいが」と述べた²⁸。ヒューズは、自分が何をどのように歪曲したのか一つでも例を挙げられるか？自分に博士号がないのが問題か？タナハシ・コーツは大学中退だが、対話に値しない人物か？（自分と同様のケンディ批判をしており、大学教員の）グレン・ラウリーやジョン・マクウォーターとも討論しない理由は？と問いかける。ヒューズにとってケンディは、彼が一貫して批判している現代アメリカのウォーキズム、キャンセルカルチャー、左派の教条主義の象徴になった。主流メディアやリベラルなアカデミズムの中に、ケンディのような著名な黒人の知的指導者を一切批判しない、できない空気が蔓延している。ヒューズは折に触れ、このケンディとの因縁に言及し続けている。直近では2022年4月1日、「イブラム・X・ケンディがついに私との討論を承諾しました！」とツイートし、エイプリル・フールと気づいた多くの支持者を笑わせている（あるいは歓喜ののち、落胆させている）²⁹。

3. 黒人保守主義者の系譜とコールマン・ヒューズ

ケンディの側は同じ『ビジネス・ジャーナル』のインタビューで、「黒人が劣っている、黒人が間違っている、と口にするだけで生計を立てている黒人保守主義者というのは大勢いるものだ」「ヒューズのような人間は昔からいて、それが許されて(given a pass)しまっている」と述べている³⁰。ここではケンディが、ヒューズという人物を迷うことなく黒人保守主義者の系譜に数えていることに注目したい。ケンディのアンチレイシズム思想を酷評するヒューズを黒人保守主義者と呼ぶことは直観的に正しいようにみえるが、問題はもう少し複雑である。保守系のシンクタンクに所属した経歴があるとはいえ、ヒューズは自身で保守主義者と名乗ったことはなく、共和党を支持してもいない。熱心な民主党支持者ではないが、これまで投票したことがある候補者は全て民主党候補者で、2020年の大統領選挙の際も、バイデンに投票すると公言している。理由としては、トランプのように分断を煽る人物を再選させることはウォーキズムを後退させることにはつながらず、むしろ過激化させられること、また、バイデンが民主党内の極左勢力にコントロールされているという陰謀論には根拠はなく、穏健なバイデン政権を選んでこれ以上の国民の分断を避けることが必要と説いた³¹。ヒューズは宗教的には無神論者を自認しており、ジェンダー、セクシュアリティ関連の発言はリバタリアンの傾向である。社会主義に共感しないという発言はしているが、社会福祉、公教育、公的医療といった再分配政策に否定的ではなく、経済格差の是正への関心は高い。自身の大学時代の政治性向について「人種問題については異端だったが、それ以外はリベラル」と表現している。

アメリカにおいて黒人保守主義(black conservatism)とは何か、黒人保守主義者(black conservatives)とは誰か、という定義をあらためて考えてみよう。保守的とされる政治信条一般、政策一般を唱える人物がたまたま黒人であれば、その人物が黒人保守主義者なのだろうか。あるいは、黒人社会の問題に特化して、それについて保守的とされる信条を唱える黒人が黒人保守主義者なのだろうか。オンダーチェ(2010)の黒人保守主義研究は、両方の要素を含めて定義している。資本主義を是認し、政治活動よりも経済活動に注力することを黒人社会に対して説く黒人の指導者や知識人が黒人保守主義者である。彼らは、白人の文化的支配や人種偏見に抗議することに注力するよりも、儉約、忍耐、勤勉、道徳によって黒人社会が自ら向上することを目指さねばならないと唱えてきた。第二次世界大戦以前から、実業家で教育者のブッカー・T・ワシントン、作家のジョージ・スカイラー(George Schuyler)やゾラ・ニール・ハーストン(Zora Neale Hurston)らがこうした主張で知られたが、オンダーチェは現代的な黒人保守主義の起点は1980年代のレーガン保守革命に置いている。レーガンからジョージ・H・W・ブッシュにかけての共和党政権は、外交では共産主義の封じ込めと軍事費の拡大、内政では「小さな政府」を掲げた減税、規制緩和、そしてキリスト教道徳へのアピールを行い、現在につながる共和党保守政治の基盤を固めた。その一環として、ジョンソン民主党政権が拡大した都市部黒人貧困層への福祉は削減に、アフターマティブ・アクションは縮小に向かう。これら共和党政権は既に大多数が民主党支持者であった黒人有権者の反発を受けつつ、政策に同調する黒人の知識人や専門家を直接、間接に重用した。現代の黒人保守主義のゴッドファーザー的な存在であるソーウェルが最初に注目を集めたのも、新たに発足するレーガン政権に対して人種政策の保守転換を提言するべく1980年12月にサンフランシスコのフェアモント・ホテルで開催された「代替手段を求める黒人の会議」(Black Alternatives' Conference)の基調講演者としてであった³²。この会議を起点に広がる人脈の中から、最高裁判事となったクラレンス・トーマス(Clarence Thomas)、共和党の重鎮政治家となったコンドリーザ・ライス(Condoleezza Rice)やコリン・パウエル(Colin Powell)らも現れてくる。政治家として、あるいは政策ブレーンや言論人として、直接、間接に共和党政治に参画する黒人が黒人保守主義者であるとするならば、その定義はヒューズにはほとんど当てはまらないようにみえる。

上坂(2014)も、現代に直接つながる黒人保守主義の起点をやはり公民権運動後の時代に求め、主要なリーダーとしてソーウェルのほか、ウォード・コナリー(Ward Connerly)、シェルビー・スティール(Shelby Steele)をとりあげている³³。ソーウェルは経済学者、コナリーはビジネスマン、スティールは英文学研究者、それぞれ出自が異なり、問題へのアプローチも異なるが、共通しているのはアフターマティブ・アクションへの反対である。彼らのアフターマティブ・アクションへの反対は、一つには、人種を根拠とした特別待遇はいかなるものであってもカラーブラインドな(=人種を考慮しない)アメリカ社会という公民権運動の理想に逆行するという原則論に根差している。もう一つは、現に行われているアフターマティブ・アクションが総体として黒人の地位向上や白人との格差是正に上手く寄与しておらず、むしろ黒人社会にとってマイナスになっているという政策評価から成っている。これに対して現代のリベラル派は、そもそも公民権運動

のゴールはカラーブラインドなアメリカではなく人種間の格差のないアメリカだった、つまり、人種間の機会平等だけでなく結果平等が実現したアメリカだったのであり、人種を根拠にしたアフーマティブ・アクションは機能していないのではなく、不十分なのだと主張している。この、カラーブラインドかカラーコンシャスかという争点は、アフーマティブ・アクションに限らず現代の人種論争の根幹にあるもので、公民権運動以前の、人種差別が合法的かつ公明正大に横行していた時代には浮上していなかった争点である。この文脈でみれば、カラーコンシャスな格差是正政策を絶対的正義とするケンディを叩き、カラーブラインドの理想を擁護するヒューズには黒人保守主義者と呼ばれる資格が十分にありそうである。

ヒューズはソーウェルの著作は全て読んだというだけあり、自身の論説でも頻繁にソーウェルに依拠し、その影響の大きさを認めている³⁴。新自由主義経済学者であるソーウェルの人種関係論は、人種に関する政策評価が主体である。ソーウェルによれば、住宅価格規制や最低賃金など格差是正を意図した政府の市場への介入が一般にそうであるように、アフーマティブ・アクションであれ強制バス通学であれ、人種間の格差や分離状態を人為的に操作しようとする試みは、概して目標を達成できなかつただけでなく、当初の問題以上に厄介な副作用を生み出してきた³⁵。政策には必ずトレードオフがあることをリベラル派は理解していない、と彼はいう。たとえば大学入学選考のアフーマティブ・アクションで難関大学に入学する黒人学生を人為的に増やすと、中堅レベルの大学であれば十分に成功できたはずの黒人学生が学力的にミスマッチの難関大学に入学して失敗し、中退するケースが増える。学力の高い黒人学生も不必要な偏見を受ける、自尊心が損なわれる、といった副作用もある³⁶。リベラル派は、政策の結果の検証を怠り、政策の意図が正しいかどうかだけを見て、同じ失敗を繰り返していると批判する³⁷。ソーウェルはまた、大学進学率、貧困率、収監率といった指標をみるときに、歴史的諸条件や文化を異にする集団間で数値が大きく異なるのは正常であり、格差があるからといって、必ずそこに不当な差別が存在するとは限らないと論じる。ソーウェルのような市場原理主義的な語り口はヒューズにはないが、人種間の格差それ自体が人種差別の証拠にはならないという「格差の誤謬」論の出発点、そして個々の政策を意図の正しさではなく結果で評価する姿勢は、彼がソーウェルから学んでいるものであろう。

シェルビー・スティールの影響はどうだろうか。『黒い憂鬱』(1990)や『白人の罪』(2006)などの書籍で、スティールは公民権運動以降の白人リベラルと黒人の相互依存という問題を提起した³⁸。アメリカの恥ずべき人種差別の歴史に罪悪感を感じ、贖罪の行動をして自身の道徳性を証明したい白人リベラルと、公民権運動後に法的な人種差別という敵を失った黒人指導者たちが、目指すべき人種平等の定義を「機会の平等」から「結果の平等」に変更し、またその目標を達成する責任を黒人社会から白人社会に転嫁するようになった。彼らにより、黒人は現在もなお有形・無形の人種差別の被害者であり、黒人社会に自助努力を求めることは被害者叩きであり、それ自体が人種差別であるというメッセージが広がった。アフーマティブ・アクションによって白人リベラルの贖罪意識と黒人指導者のヒロイズムは満たされるが、黒人の被害者意識、無力感、依存心が再生産され、黒人社会の貧困や犯罪は放置される。このスティールの問題提起は、コー

ツやケンディの世界観に疑義を提示し続けるヒューズにもそのまま共有されている。2020年10月、スティールは息子の映像作家イライ・スティールと共に制作したドキュメンタリー映画『何がマイケル・ブラウンを殺したか』をストリーミング公開した³⁹。BLMを燃え上がらせ、国民の分断を加速させた2014年のファーガソン事件の報道がいかに偏向していたか、いかに現在も多く国民が事件を当時の報道そのままに記憶しているかを指摘し、なぜ主流メディアは捜査と裁判で検証された事実関係を伝えるよりも、「無抵抗の黒人少年が人種差別主義者の白人警官に冷酷に射殺された」という「詩的な真実(poetic truth)」の拡散を好むのかを問う作品である。メディアがリベラルな白人の贖罪意識と黒人の被害者意識を煽り、利権化し自己目的化した抗議運動を助長する一方で、全米の無数のマイケル・ブラウンのような黒人少年に無謀な行動をさせてしまう家庭環境、地域経済、教育環境の荒廃という本来取り組むべき問題から人々の目を背けさせたファーガソン事件報道は、現代アメリカの人種政治の縮図であると作品は主張する。ヒューズは2021年2月19日の『コールマンとの会話』にスティール親子を招いてインタビューを行っている⁴⁰。

ヒューズがソーウェル、スティールら現代の代表的な黒人保守主義者の思想的伝統と問題意識を引き継いでいることは明らかだが、彼が共和党政治にコミットしていないことはどのように考えればよいだろうか。一つ言えることは、公民権運動以降の民主党の人種問題へのアプローチに黒人保守主義者が一貫して反対してきたことは確かに事実であるが、共和党政治との距離は論客によって大きな幅があることである。この点でオンダーチェや上杉らの先行研究は、黒人保守主義者を定義する上で共和党政治との関係を少し重視し過ぎているかも知れない。ヒューズのように、人種問題以外の社会課題について特段に保守的ではなく、保守派を自称してもいない黒人保守主義者としては、言語学者のジョン・マクウォーターという先達がいる。本業の言語学でも多くの著作がある学者であるが、2000年に『敗北のレイス：黒人アメリカの自滅』(未邦訳)を著し、黒人社会にまん延する反知性主義、分離主義、被害者意識が黒人社会の停滞の原因であると論じて以降、メディアから代表的な黒人保守主義者の一人と見なされるようになった⁴¹。直近の2021年の『ウォーク・レイシズム：黒人アメリカを裏切る新宗教』(未邦訳)では、人種差別を声高に訴え異論を排除しようとするウォーキズムとキャンセルカルチャーはもはや一種の宗教となってアメリカ社会を蝕んでおり、黒人社会にとっても極めて有害であると警告し、理性ある穏健なりベラル派は勇気をもってこの新宗教に抵抗するべきであると説いている⁴²。雄弁なコメンテーターであり、異論を唱える論客との討論も積極的に行うマクウォーターは大手メディアへの出演も多いが、ビデオブログ・ディスカッションサイトBloggingheads.tvで自身の配信番組を持つ経済学者グレン・ラウリーと隔週でオンライン出演し、時事ニュースを語り合う発信を行っている⁴³。思想面だけでなく、インターネット、ソーシャルメディアを拠点に独立した言論活動の面でも、ヒューズにとっての先達、ロールモデルといえよう。マクウォーターの隔週対談の相方、経済学者のラウリーは、マクウォーターよりも一世代上で、かつてレーガン政権を支えた1980年代の黒人保守主義を代表する知識人の一人であったが、2002年初版の『人種的不平等の解剖学』(未邦訳)では、過去の人種差別が黒人に与えた人種的スティグマが不平等を再生産する重要な要因となっていると論じ、アフーマティブ・アクションを容認する中道的な姿勢になった⁴⁴。

現在に至るまでイデオロギーには拘泥せず、相手が左派知識人のコーネル・ウエスト(Cornel West)であれ、白人至上主義者と罵られることもある右派の政治学者チャールズ・マレーであれ、友好的に対話し、人種関係の現状分析と政策を是々非々で議論する姿勢をとっている。ラウリーとマクウォーターにとって、黒人保守主義者のレッテルはメディアから与えられたものに過ぎない⁴⁵。1996年生まれのヒューズ、1965年生まれのマクウォーター、1948年生まれのラウリーは、保守を自認していない黒人保守主義者という共通点を持ち、互いの番組にゲスト出演し、世代をまたいだ協力関係にある。

マクウォーターやラウリーと同様、ヒューズを黒人保守主義者の系譜に数えるべきもう一つの理由は、彼がこれまでの先達と同じく、黒人として異端とされている言論によって、背教者、裏切者の汚名を着せられることを積極的に受け入れていることである。上坂は、それが定義になるかはともかく、「アンクル・トム」の汚名を着せられることはブッカー・T・ワシントン以来の黒人保守主義者の宿命としている⁴⁶。リベラルなメディアにおいてはもちろん、アカデミックな研究においても、黒人保守主義者は存在するだけで大多数の黒人の利益に反するかのようには評されることが少なくない。アサンテとホール(2011)の研究は「ハウス・ニグロ」、すなわち、奴隷制時代に奴隷主の白人に屋内で仕え、野良仕事をする黒人奴隷を見下し、白人の利益を代弁するようになった奴隷、というメタファーで現代の黒人保守主義者を理解しようとしている。大森(2014)も、スティールや(転向以前の)ラウリーを指して、「野蛮」なカラーブラインド主義で「貧しい黒人に自立(だけ)を説いて」おり、「不満の声を上げる白人と、不気味なユニゾンを奏で」る人物であるとしている⁴⁷。

黒人の同胞から汚名を着せられ、リベラル派の識者から罵られることは、黒人保守主義者の訴求力、影響力とも表裏一体であった。ディラード(2001)の研究は、黒人だけでなく、ラティノ、女性、同性愛者といったマイノリティ属性を持つ保守政治家や保守言論人が、いかにそのマイノリティとしてのアイデンティティゆえに共和党政治と白人保守層に歓迎され、1990年代までに保守政治において確固たる勢力を構成するようになったかを論じた⁴⁸。黒人がアフーマティブアクションに反対している、女性がフェミニズムに反対している、ということで注目され、発言力が高まる。アイデンティティ政治を批判するマイノリティの論客も、アイデンティティ政治から離脱することはできない。ヒューズは、ディラードが指摘するこのジレンマにも自覚的である。「冒涇」の歌詞において、別人格の分身によって自分を白人に媚びる「アンクル・ラッカス」(アニメ『ブーンボックス』に登場するアンクル・トムの現代版のようなキャラクター)と罵らせているのは、誹謗中傷は覚悟の上であり、黒人保守主義者とみなされることを発言力に変えていくという宣言であろう。

4. インテレクチュアル・ダークウェブとソーシャル・メディア時代の黒人保守主義

現代のソーシャル・メディアにおける黒人保守主義者を全体的に見渡すと、ヒューズやマクウォーターのように共和党政治から距離を置き、ドナルド・トランプを嫌悪する論客はどちらかといえば少数派で、黒人のトランプ支持者のほうが目立っている。2020年6月公開のドキュメンタ

リー映画『アンクル・トム — アメリカ黒人保守主義のオーラルヒストリー』は、一般市民を含む多数の黒人保守主義者のインタビューで構成される作品だが、先述のキャンディス・オーウェンズのほか、オーウェンズのメンター的存在で製作者の一人でもあるラジオショーホストでポッドキャスターのラリー・エルダー(Larry Elder)、コミュニティ活動家のロバート・ウッドソン(Robert Woodson)、元下院議員のアレン・ウエスト(Allen West)、元政治学者で政治家のキャロル・スウェイン(Carol Swain)、元警官で反BLMのソーシャルメディア・コメンテーターのブランドン・テイタム(Brandon Tatum)、実業家の故ハーマン・ケイン(Herman Cain)らがフィーチャーされている。いずれも保守主義者であることを自認し、(少なくとも取材時点で)ドナルド・トランプ率いる共和党を支持している⁴⁹。作品のもつ党派性は明白で、「民主党は、かつて奴隷制と人種差別を支持した党であった過去を巧妙に隠蔽している」とか、「マーガレット・サンガーは優生学の信奉者であり黒人人口を減らそうとしていた。現代のプロ・チョイス運動も黒人を根絶やしにしようとする運動だ」といった、陰謀論に類する発言が次々に注釈もなく流れる。データやエビデンスよりも感情に訴える演出である。こうした反知性主義的な黒人保守主義も、ソーシャルメディアを通じて着実に広がりつつあるようにみえる。

ヒューズの黒人保守主義言論は、同じインターネット空間でも、やや別の視聴者層に広がっている。それは、リベラル色の強いアカデミズムや主流メディアのポリティカル・コレクトネス、ウォーキズムを嫌い、インターネット上の独自のプラットフォームやポッドキャスト、ソーシャルメディアで言論活動を行うようになった一群の学者やトークショーホストらによるネットワークで、2018年頃から「インテレクチュアル・ダークウェブ (Intellectual Dark Web, IDW)」と呼ばれているものである。「ダークウェブ」といっても「タブーに触れる言論のウェブ」という程度のニュアンスであり、アクセス制限があるわけではない。特定の言論人がリストされているわけでもなく、その種の言論の場を求める言論人と視聴者がつくる不定形のつながりである。IDWの名付け親でもある数学者エリック・ワインスタイン(Eric Weinstein)、神経科学者のサム・ハリス(Sam Harris)、コメディアンで司会者のデイブ・ルービン(Dave Rubin)、進化生物学者ブレット・ワインスタイン(Bret Weinstein)、心理学者ジョーダン・ピーターソン(Jordan Peterson)、保守派の政治コメンテーターのベン・シャピロ(Ben Shapiro)、フェミニスト思想家のクリスティナ・ホフ・サマーズ(Christina Hoff Sommers)らといった人々がIDWを構成しているとされる。彼らは政治的スペクトラムで見ると保守、リベラルに幅広くまたがっているが、ウォーキズムにおもねるアカデミズムと主流メディアが、エビデンスよりも道徳感情を優先する反知性主義に陥っているという認識を共有している。宗教批判、フェミニズム批判、BLM批判などタブーに触れるトピックを積極的に扱い、イデオロギーを異にする相手とも科学的、統計的エビデンスを重視した討論をすることを志す⁵⁰。ヒューズが言論人としてのキャリアをスタートさせた『キレット』も、しばしばIDWの一部に含められている。ヒューズのポッドキャストの最初のゲストも代表的なIDWの知識人とされるサム・ハリスであった。博士学位などのアカデミックなクレデンシャルを持たないヒューズが、著名な学者を含む多彩なゲストを自身のポッドキャストに招くことができる背景には、こうしたインフォーマルな言論ネットワークの隆盛が背景にある。

IDWは境界線の定まったネットワークではなく、主流のアカデミズムとメディアへの反感や懐疑が基底にあるので、オルタナ右翼や陰謀論者を引きつけることもある⁵¹。データ重視、事実重視の黒人保守主義者とはとても言えないオーウェンズがIDWに含めて論じられることもある。実際、カジュアルな視聴者、読者にとってはヒューズとオーウェンズの区別は難しいようで、「冒涇」のミュージック・ビデオを批評したある評者は、オーウェンズをヒューズの「同伴者(fellow traveller)」と書いた。ヒューズはツイッターで「評者殿、キャンディス・オーウェンズは妄想屋で不正直者です。・・・最も悪質なトランプの手下です。私はトランプには二回とも反対票を入れています。我々が同じに見えるなら、真面目に注意を払っていないのでしょうか」と不満を漏らしている⁵²。ヒューズの音楽活動は、組織に属さない彼の言論をさらに多くの視聴者、読者に届ける力を持つであろう。しかし、そこからデータ、エビデンス、論理を重視した対話に視聴者を導くとは限らない。

5. むすびにかえて

本稿は、若き異能の論客コールマン・ヒューズの思想と言論活動を、アメリカの黒人保守主義の伝統という枠組みで観察してきた。彼の黒人保守主義思想はトマス・ソーウェルやシェルビー・スティールら従来の代表的な黒人保守主義者を継承するものでありつつ、市場原理主義には組しない折衷的なものである。共和党がトランプ的な反知性主義ポピュリズムに傾倒する現在、共和党政治からは完全に距離を置いている。左派のウォーキズム、キャンセルカルチャー、アイデンティティ政治への手厳しい批判とソーシャル・メディアを駆使した情報発信はオーウェンズのような黒人トランプ支持者とも共通しているが、ヒューズは左右どちらであれ反知性主義的な道徳主義や陰謀論を嫌う。グレン・ラウリー、ジョン・マクウォーターらの先達と共に、リベラル派の識者と是々非々で対話ができる中道的な黒人保守主義者といえる。

オバマ政権の二期目から現在にかけ、ソーシャルメディアの拡大と比例するようにアメリカ国民の分断は加速し、保守派の内部、リベラル派の内部、それぞれでも危機的な分断が進んでいる。とりわけ、2012年2月のトレイボン・マーティン射殺事件以降の人種問題をめぐる分断は深刻である。保守思想史の大家ジョージ・H・ナッシュは、トランプ型のポピュリズムが保守派の内部にある亀裂を広げて弱体化させていることを受け、教条的な主張や攻撃的なレトリックを控え、小異を捨てて大同につくような「コモンセンス保守主義(common sense conservatism)」が今こそ必要であると述べている⁵³。リベラル派の側にも、教条的なキャンセルカルチャー、ウォーキズムと距離をとったコモンセンス・リベラリズムが必要とされているといえるだろう。優れたトークショーホスト、論客であるだけでなく、ミュージシャン、ラッパーとしての能力も備えたコールマン・ヒューズは、現代の人種をめぐる分断を乗り越えた対話を生み出すことができるだろうか。イデオロギーの左右を問わず、より多くの人々がヒューズのようにコモンセンスのある黒人保守主義者の主張に出会い、先入観を廃して向き合うことが期待される。

Summary

Coleman Hughes and Black Conservatism in Social Media Era

Yusuke Torii

This paper examines the journalistic and artistic activities of Coleman Hughes, a young black columnist, podcaster, musician, and rapper known for his critique of the contemporary American racial protest movement. It situates Hughes in the lineage of black conservatism since Booker T. Washington, and considers the constructive role that he could play in the contemporary discursive space in which the Internet and social media threaten traditional academia and major media outlets. Although Hughes does not self-identify as a conservative or support Republican politics, the columns and raps he writes and the conversations he has with a wide variety of guests on his podcast demonstrate that he has inherited the framework of thought and problematics of black conservatism. He also strategically accepts being seen by some as a "traitor" to the black community. In the past decade, the division of the American public over racial issues has accelerated, with both Trumpian anti-intellectual populism within conservatives and extreme anti-racism, cancel culture, and wokeism within liberals undermining constructive, fact-based debate. The potential role of a centrist black conservative like Hughes is more significant than ever.

注

- ¹ COLDXMAN - *Blasphemy* (Official Music Video), 2022, <https://www.youtube.com/watch?v=YEkFBVErK7E>.
- ² Ta-Nehisi Coates, “The Case for Reparations,” *The Atlantic*, May 22, 2014, <https://www.theatlantic.com/magazine/archive/2014/06/the-case-for-reparations/361631/>; *Between the World and Me*, 1st edition (New York: One World, 2015).後者は邦訳タナハシ・コーツ『世界と僕のあいだに』池田年穂訳（慶應義塾大学出版会, 2017）がある。
- ³ James Maitre, “Blasphemy by Ian Pons Jewell // Coldxman Music Video,” Directors Notes (blog), March 10, 2022, <https://directorsnotes.com/2022/03/10/ian-pons-jewell-blasphemy/>.
- ⁴ “Coleman Hughes,” accessed September 7, 2022, <https://colemanhughes.org/>.
- ⁵ ヒューズのバイオグラフィーは “23-Year-Old Coleman Hughes Is Reframing the Discussion on Race: Podcast,” Reason.Com (blog), accessed September 7, 2022, <https://reason.com/podcast/2019/03/08/coleman-hughes-podcast/>.のほか、少年時代のエピソードについてヒューズ自身のポッドキャスト番組 “Conversations with Coleman – Coleman Hughes,” <https://colemanhughes.org/conversations-with-coleman/> より、ヤシャ・モンクを迎えた2022年5月20日配信のエピソード等を参照している。Coleman Hughes *On Democracy and Diversity with Yascha Mounk [S3 Ep.16]*, 2022, <https://www.youtube.com/watch?v=l-0ESv0vzjY>.
- ⁶ “What is Quillette?” accessed September 8, 2022, <https://quillette.com/about/>.
- ⁷ Coleman Hughes, “Kanye West and the Future of Black Conservatism,” *Quillette*, April 24, 2018, <https://quillette.com/2018/04/24/kanye-west-future-black-conservatism/>.
- ⁸ Hughes, “The Racism Treadmill,” *Quillette*, May 14, 2018, <https://quillette.com/2018/05/14/the-racism-treadmill/>.
- ⁹ Steven Pinker, *Enlightenment Now*, (New York: Penguin Books, 2019).
- ¹⁰ Gallup Inc, “In U.S., 87% Approve of Black-White Marriage, vs. 4% in 1958,” Gallup.com, July 25, 2013, <https://news.gallup.com/poll/163697/approve-marriage-blacks-whites.aspx>.
- ¹¹ Hughes, “The Racism Treadmill.”
- ¹² Ibid.
- ¹³ Hughes, “Reparations and Ta-Nehisi Coates’s Pyrrhic Victory,” *Quillette*, March 17, 2019, <https://quillette.com/2019/03/17/reparations-and-ta-nehisi-coates-pyrrhic-victory/>.
- ¹⁴ Hughes, “My Testimony on Reparations,” *Quillette*, June 20, 2019, <https://quillette.com/2019/06/20/my-testimony-to-congress-on-reparations/>.
- ¹⁵ “City Journal - City Journal is pleased to announce that writer and...,” accessed September 8, 2022, https://fr-fr.facebook.com/CityJournal/posts/city-journal-is-pleased-to-announce-that-writer-and-public-intellectual-coleman-/10159975072076038/?locale2=fr_FR.
- ¹⁶ Hughes, “What the New Integrationists Fail to See,” *City Journal*, July 2, 2018, <https://www.city-journal.org/html/black-only-schools-16000.html>; Coleman Hughes, “Misreading the Minimum Wage — and Race,” *City Journal*, August 21, 2018, <https://www.city-journal.org/html/misreading-minimum-wage-and-race-16127.html>.
- ¹⁷ Ibram X. Kendi, *Stamped from the Beginning: The Definitive History of Racist Ideas in America*, Reprint edition (New York: Bold Type Books, 2017).
- ¹⁸ Kendi, *How to Be an Antiracist*, First Edition (New York: One World, 2019); Robin DiAngelo, *White Fragility: Why It’s So Hard for White People to Talk About Racism*, Reprint edition (Boston: Beacon Press, 2018).それぞれ邦訳がある。イブラム・X・ケンディ、児島修訳『アンチレイシストであるためには』（辰巳出版, 2021）、ロビン・ディアンジェロ、堂嘉之他訳『ホワイト・フラジリティ 私たちはなぜレイシズムに向き合えないのか？』（明石書店, 2021）。
- ¹⁹ Hughes, “How to Be an Anti-Intellectual,” *City Journal*, October 25, 2019, <https://www.city-journal.org/how-to-be-an-antiracist>.

- ²⁰ Ibid.
- ²¹ ケンディはエズラ・クラインによるインタビューで実際にそのように答えている。“Transcript: Ezra Klein Interviews Ibram X. Kendi,” *The New York Times*, July 16, 2021, sec. Podcasts, <https://www.nytimes.com/2021/07/16/podcasts/transcript-ezra-klein-interviews-ibram-x-kendi.html>.
- ²² Hughes, “How to Be an Anti-Intellectual.”
- ²³ Kendi, *How to Be an Antiracist*, p.19.
- ²⁴ Kendi, “Pass an Anti-Racist Constitutional Amendment,” accessed September 2, 2022, <https://politico.com/interactives/2019/how-to-fix-politics-in-america/inequality/pass-an-anti-racist-constitutional-amendment/>.
- ²⁵ Hughes, “How to Be an Anti-Intellectual.”
- ²⁶ Hughes, “Conversations With Coleman: My Open Letter To Ibram X. Kendi - Bonus on Apple Podcasts,” Apple Podcasts, accessed September 8, 2022, <https://podcasts.apple.com/us/podcast/my-open-letter-to-ibram-x-kendi-bonus/id1489326460?i=1000495328094>.
- ²⁷ Hughes, *Ibram X. Kendi Turned Down My Offer*, 2021, <https://www.youtube.com/watch?v=eLUijQtW5cA>.
- ²⁸ “Ibram X. Kendi, Author and Professor at Boston University, Challenges Colleges to Be Anti-Racist While Pushing Back on Critics,” *The Business Journals*, accessed September 2, 2022, <https://www.bizjournals.com/bizjournals/news/2020/12/10/ibram-kendi-colleges-anti-racist-pushes-critics.html>.
- ²⁹ Hughes [@coldxman], “Sorry y’all. This Was an April Fools, If You Haven’t Already Figured It out. Couldn’t Help Myself...,” Tweet, *Twitter*, April 1, 2022, <https://twitter.com/coldxman/status/1509946168398204932>.
- ³⁰ “Ibram X. Kendi, Author and Professor at Boston University.”
- ³¹ Hughes, *Why I’m Voting for Biden? [Bonus Episode]*, 2020, <https://www.youtube.com/watch?v=NW4b47mHfOk>.
- ³² Michael L. Ondaatje, *Black Conservative Intellectuals in Modern America* (Philadelphia: University of Pennsylvania Press, 2012), pp3-5.
- ³³ 上坂昇『アメリカの黒人保守思想—反オバマの黒人共和党勢力』（明石書店、2014）、49-115頁。
- ³⁴ Hughes, “The Nonconformist,” *City Journal* (Summer 2020), <https://www.city-journal.org/thomas-sowell-race-poverty-culture>.
- ³⁵ Thomas Sowell, “Affirmative Action Around the World,” reader, *The Thomas Sowell Reader* (New York: Basic Books, 2011), pp.287-304.
- ³⁶ 上坂、88-115頁; Sowell, *The Vision of the Anointed: Self-Congratulation as a Basis for Social Policy* (New York, NY: Basic Books, 1996).
- ³⁷ Sowell, “The Pattern of the Anointed,” *The Thomas Sowell Reader*, 1st edition (New York: Basic Books, 2011), pp.148-170.
- ³⁸ Shelby Steele, *Content of Our Character: A New Vision of Race in America*, 第1版 (New York, NY: St Martins Pr, 1990); *White Guilt: How Blacks and Whites Together Destroyed the Promise of the Civil Rights Era* (New York: Harper, 2006).それぞれ邦訳がある。シェルビースティール『黒い憂鬱—90年代アメリカの新しい人種関係』（五月書房、1997）; 『白い罪 公民権運動はなぜ敗北したか』（径書房、2011）。
- ³⁹ *What Killed Michael Brown?*, directed by Eli Steele (2020). <https://whatkilledmichaelbrown.com/>.
- ⁴⁰ Coleman Hughes on “What Killed Michael Brown?” with Shelby & Eli Steele [S2 Ep.5], 2021, <https://www.youtube.com/watch?v=f4Z1pD1k-bs>.
- ⁴¹ John H. McWhorter, *Losing the Race: Self-Sabotage in Black America*, (New York: Free Press, 2000).
- ⁴² McWhorter, *Woke Racism: How a New Religion Has Betrayed Black America* (New York: Portfolio, 2021).
- ⁴³ “The Glenn Show,” *bloggingheads.tv*, accessed September 7, 2022, <https://bloggingheads.tv/programs/current/glenn-show>.
- ⁴⁴ Glenn C. Loury, “Preface to the Second Paperback Edition,” *The Anatomy of Racial Inequality: With a New Preface*, 2nd edition (Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press, 2021), Kindle edition;

- Salim Muwakkil, “Glenn Loury: The Conversion of a Black Conservative,” *Chicago Tribune*, Jun 24, 2002, accessed September 7, 2022, <https://www.chicagotribune.com/news/ct-xpm-2002-06-24-0206240026-story.html>.
- ⁴⁵ Loury, “What Is ‘Black Conservatism’?,” *Substack newsletter*, Glenn Loury (blog), August 25, 2021, <https://glennloury.substack.com/p/what-is-black-conservatism>.
- ⁴⁶ 上坂、21-22頁。
- ⁴⁷ 大森一輝『アフリカ系アメリカ人という困難: 奴隷解放後の黒人知識人と「人種」』(彩流社、2014年)、190-191頁。
- ⁴⁸ Angela D. Dillard, *Guess Who’s Coming to Dinner Now?: Multicultural Conservatism in America*, *American History and Culture* (New York: New York University Press, 2001).
- ⁴⁹ *Uncle Tom: An Oral history of the American Black Conservative*, directed by Justin Malone (Malone Pictures, 2020), <https://www.uncletom.com/utpart1>; “‘Uncle Tom’ Documentary Explores What It’s Like to Be a Minority Within a Minority Group, a Black Conservative,” accessed September 7, 2022, <https://web.archive.org/web/20200321171323/https://www.newsweek.com/uncle-tom-documentary-explores-what-its-like-minority-within-minority-group-black-1493462>.
- ⁵⁰ Bari Weiss and Damon Winter, “Opinion | Meet the Renegades of the Intellectual Dark Web,” *The New York Times*, May 8, 2018, sec. Opinion, <https://www.nytimes.com/2018/05/08/opinion/intellectual-dark-web.html>.
- ⁵¹ 木澤 佐登志「欧米を揺るがす『インテレクチュアル・ダークウェブ』のヤバイ存在感」『現代ビジネス』2019年1月17日<https://gendai.ismedia.jp/articles/-/59351>, accessed September 7, 2022.
- ⁵² Hughes [@coldxman], “Dear Reviewer, Candace Owens Is Delusional & Dishonest. I’ve Said It before. She’s the Worst of the Trump Lackeys; I Voted against Trump Twice. If You Think We’re the Same, You Haven’t Been Paying Attention. (And pro Tip: Spell Check Is Your Friend) <https://Davidreviews.Tv> <https://T.Co/K5cc7D6lDj>,” *Tweet, Twitter*, January 21, 2022, <https://twitter.com/coldxman/status/1484578566700425216>.
- ⁵³ George H. Nash, “Conservatism and Its Current Discontents: A Survey and a Modest Proposal,” *RELIGION & LIBERTY* (Acton Institute), May 2, 2022, <https://www.acton.org/religion-liberty/volume-35-number-1-2/conservatism-and-its-current-discontents-survey-and-modest>.

(鳥居祐介 撰南大学)